

**三国薈学生国際交流
PEN-International親善大使の中国訪問**

筑波技術短期大学
松藤みどり

1. PEN-Internationalとは

「筑波技術短期大学から3人の学生と2人の教員を中国に派遣し、親善大使として天津理工大学（中国式には天津理工学院）の中に設置されている天津聾工科大学（天津聾人工学院）の学生、教職員と交流するように。交通費、滞在費はPEN-Internationalが負担する。アメリカからは6人の学生、2人の通訳、2人の教職員を派遣する。」

今まで考えたこともなかった交流計画が21世紀幕開けの春、PEN-Internationalの事務局長、NTID（ナショナル聾工科大学）のデカロ博士から提案された。

PEN (Post-secondary Education Network) -Internationalとは、世界各国の聴覚障害者のための高等教育機関をネットワーク化する5ヶ年のプロジェクトである。2001年6月に日本財団の出資を受けて正式に発足し、筑波技術短期大学（技短）は、NTID、天津理工大学、モスクワ工科大学とともに、その一員となっている。

2. 筑波技術短期大学の取り組み

技短は次のようなスケジュールでこのプロジェクトに取り組んだ。

5月 学生募集開始

6月 学生応募締め切り

7月 選考と結果通知、課題の指示

9月、10月、11月 ほぼ2週間おきのオリエンテーション

11月25日出発

12月1日帰国

聴覚部の160余名の学生全員に募集要項を配布した結果、7名が応募した。書類選考と面接を経て、二年生の3名が選ばれた。3名とも成績上位の学生で、2名は英検準2級に合格、他の1名も同程度の英語力である。2名は3月に実施されたアメリカ研修旅行に参加して、ASLでコミュニケーションをした経験があった。

選ばれた学生には、自己紹介と技短の紹介の英作文を夏休みの課題とした。

9月11日にアメリカの航空機を用いたテロ事件が勃発し、このプロジェクトの実行が危ぶまれる一幕もあった。デカロ博士は10月1日にRIT（ロチェスター工科大学）の

NTID担当副学長、ロバート・ダビラ博士を伴ってPEN-Internationalラボの開局式のために技短を訪問し、テロに対する恐怖を克服して国際交流を続けることの重要性を力強く訴えた。日本側は、日本の航空機を利用すること条件に、計画を遂行することにした。

3. 言語の問題

このような国際交流の場で問題になるのは、まず言語である。このプロジェクトでは3種類の音声言語と3種類の手話が必要であった。NTIDには、RITで学ぶ学生のための手話通訳者が100人おり、そのうちの2人が来ることになっていた。教職員は、ASLのみならず、日本語と日本の手話にも堪能な言語学者スザン・フィッシュヤー先生と、研修旅行でいつもお世話になるビジター・センターのロバート・ベイカー氏が派遣されることになった。天津側は、理工大に英語専門の通訳の方がいて、事前の必要な連絡は彼を通して行われた。専門の手話通訳者はおらず、教授陣が交代で学生に対する通訳を担当した。日本側は中国籍で日本語にも英語にも精通している建築工学科の張先生と私が行くことになった。張先生の中国語と英語の間の通訳は、アメリカ人にも有益であった。私は英語と日本人学生との間の通訳を担当した。

親善大使としての学生の任務の一つは、それぞれの国の教育制度について発表することであった。日本人学生は何語で発表すべきだろうか。これが準備段階での第一の問題であった。三人の学生は、かなり明瞭な日本語を発声することができ、授業では英語の発音も指導している。しかしながら、中国とアメリカの聾の学生を前に、日本人の聾学生が音声英語で発表したとして、どれだけの意味があるだろう。学生と協議し、フィッシュヤー先生とも相談した結果、パワーポイントに英語を提示し、音声と手話を伴った日本語で発表することにした。提示する英語の指導にはかなりの時間を費やした。幸いなことに、三人ともパワーポイントには習熟しており、有効な提示ができたと思う。

学生同士の会話には健聴の通訳が介入す

る必要はほとんどなく、彼らなりに工夫してコミュニケーションを取っていた。施設見学などの場面では、アメリカには二人の専任通訳による情報保障がなされたのに対し、日本側は素人が外国語から手話への通訳をしなければならず、不十分な伝達になったことは残念であった。

4. 異文化理解のために

言語の次に問題となるのが、出し物とお土産である。アメリカ研修旅行にも、日本の文化を理解してもらうために、寸劇や踊りやゲームを用意して行くが、今回はたった三人なので、学生の一人がサークル活動としてやっている「民舞」の「御神楽」を踊ることにした。豊作を祈ったり感謝したりするため奉納する扇を使った短い舞を、三人は相当な時間をかけて練習したようである。

発表の場は、二日目の夜、天津の聾の学生のダンスや寸劇、理工大の聴の学生のカンフーの演技の後の大舞台と、四日目に天津聾学校を訪れたときの二回あった。

理工大のカンフーにはインターナショナル・チャンピョンも登場し、質の高い迫力のある演技であった。その後日本人学生は、音楽も鳴り物もない素朴な舞を優雅に堂々と披露し、拍手喝采を浴びた。聾学校では借りた扇子がひらひらした羽根のついたもので、踊りの雰囲気が変わっておもしろかった。

お土産は、CADを使って作った技短のキー・ホルダーに、市販の牛の根付をつけ足したものと、I Love You のマークの焼き印を押したお饅頭をあつらえて用意した。「牛」は中国人には「来年の干支」とすぐにわかつてもらえたが、東部出身のアメリカ人たちは説明が必要だった。I Love You を表す中国語は「我愛■」である、と言つてみると、張先生から「中国語ではそれは『結婚して下さい』という意味になります。」という説明が入り、日米の学生は、その言葉は気をつけて使わなければならないことを理解した。

これらは異文化理解のきっかけとなる小道具であったと言える。中国の学生からのプレゼントは、手工芸品、印鑑、書道の作品など、ほとんどが手作りであり、アメリカからの、NTIDのマーク入りの帽子やマグ

カップなどとは対照的であった。

5. 今後の計画と学生の反応

日本人学生は、礼儀正しく社交的であるとの評価を得て、アメリカの学生に少しも引けを取らずに立派に親善大使の役割を果たした。初年度の成功を受けて、この交流プログラムはあと4年継続される見通しとなった。5月に中国の学生が日本に立ち寄り、日本の学生と共にアメリカに渡る、という計画も始まっている。PEN-Internationalの奨学金により、技短からは毎年アメリカに6人、中国あるいはロシアなどに3人の学生が派遣されることになる。この交流活動を通して学生が何を感じ、何を得たかは、彼らの手記から一番良く知ることができるであろう。

PEN-Internationalの日本代表として

電子情報学科情報工学専攻 2年
長谷川 晃子

私がこのPENに応募した理由は二つある。一つは、他の国での聴覚障害者保障制度を知りたかったこと。特に中国へ行くのはめったにないチャンスだと思った。もう一つは、三国の学生代表が集い、お互いにディスカッションをしてみたかったことである。そして、私はPEN-Internationalの親善大使として初めて中国へ渡った。

私がこのプログラムで一番期待していた事は、三国のろう学生と様々なテーマについて話し合うことだった。例えば、中国では障害者保障制度はどのような仕組みなのか、ろう学生の日常生活、今問題になっていることなど、私の心は好奇心で溢れていた。

実際に天津理工大学で、5日間交流してみて私は沢山の「文化的な違い」についてこの目ではっきりと見ることが出来た。

まず、一番感じたことは、中国では教師と生徒のコミュニケーションがきちんと取れ正在のことだった。中国のろう学校での教師達は皆、口話、読話、手話を用い、どれもはっきりした表現で生徒にきちんと伝えていた。また、ろう学校のほとんどの生徒は聴力が軽く、補聴器を装着していかなかった。コミュニケーションがきちんと取れているのは教師達が手話を身に付け、そし

て生徒達もほとんどがある程度は聞こえているからなのだろうと私は思った。中国での障害に対する保障はどうなっているのか中国の学生に聞くと、日本と同じように障害者手当金があり、それを受けて生活している人もいると答えが返ってきた。アメリカではそのような制度はなく、逆に、障害者が自立できるような環境が整っているとのことだった。このように三国での保障制度が違う事に気づいた。

またろう学校では一体感があった。クラスに個人の成績表が書かれており、さらに学校の廊下にクラスごとの成績表も書かれていた。皆がいい成績を取る為に必死になっていることが強く感じられた。

日常生活の中では、宿舎のお湯の出る時間が限られていたり、大学のトイレは水を流さない形式だったりした。古くなった本はまとめて別の所で売られていた。便箋と封筒もかなり古く、大事に保管されていたようであった。そこで私は中国人には物を無駄にしない生活が身についていると思った。

天津での学生同士での交流では、最初に期待していたようにディスカッションはできなかったが、中国語、英語、日本語が混ざった会話は非常に新鮮だった。お互いに相手になんとか伝えようと必死になる。そして伝わったときは本当に嬉しくなる。

アメリカで聞いた自動車免許について中国の学生に聞いてみると、中国では聴覚障害者は運転免許を持つことは禁止されてると教えてくれた。その事には驚いた。アメリカでは聴力が重くても、目でしっかりと見れば問題ないという考え方、中国では"音"が耳に入らないから禁止するという考え方であることが分かった。

このように三国の「文化的な違い」について知ることができ、とても貴重な経験となった。

また、今回の派遣で友達となった中国、アメリカの学生との友情は、これからも大事にしていきたい。また機会があればその時は真剣に、障害に対する考え方についてディスカッションをしてみたいと思う。

初めての中国と海外の人との交流

建築工学科 2年

泉 直人

11月25日から12月1日まで、PENインターナショナル親善大使（NTIDの学生6人とTCTの学生3人）、そして先生達を含め約20名が中国の天津にある「天津理工学院聾人工学院」の学生や教職員と交流することを目的として中国を訪問しました。

私自身、今回の訪問が二度目の海外旅行です。しかし、中国へ行くことは初めてであり、また海外の学生と交流することも初めてでした。それなりに期待もありましたが、「うまくやっていけるかどうか」という不安もありました。

北京空港到着後、天津に着くまでバスの中でNTIDの学生と一緒にになりました。それまで海外の人々と会話したことがなかった私は、最初は何と言えばいいのかわからない状態でした。他の皆さんのが上手くコミュニケーションしていましたので、友達の助けもあってASL（アメリカ手話）がほとんど出来なかつた私も、英語の筆談で何とか会話が出来ました。初めてアメリカの学生と交流をして、コミュニケーションや会話は「英語」だけではなく、他の方法でも成り立つことがわかりました。例えば、顔の表情や身振りのみでもコミュニケーションが出来るなどです。ASL（アメリカ手話）もこの一週間で自然に覚え、最後は筆談なしでも会話がスムーズに出来ました。帰国後、何日かたった今もASL（アメリカ手話）はほとんど忘れていません。中国の手話も同じようなことが言えますが、そこの環境に馴染んで覚えたことは印象深く残り、なかなか忘れないことも今回の訪問で気がついたことの一つでした。

中国滞在中、天津理工学院大学や天津聾学校、またテレビ塔、寺院などを見学しました。天津理工学院大学の外観は素晴らしいものでしたが、トイレなど環境設備などが十分に整っていないなど、他の色々な建物を見学して、日本の建物と比べて遅れていると強く感じました。また、交通の設備もあまりよくなく、車線をはみ出して走行する車、信号を無視して渡ろうとする人の姿も珍しいことではなかったです。実際に中国へ訪問して、日本では見られないようなことが数多くあり、中国という国の「珍しさ」と「恐怖」を感じました。

夕食後は毎晩、中国の学生との交流で盛

り上がりりました。中国の学生は、私達日本人と見かけがあまり変わらないので、親近感がありましたが、いくら顔や外観が似ていても、こちらは日本語、向こうは中国語です。コミュニケーション方法は主に英語の筆談でしたが、漢字を使ってお互いに通じることもありました。各国の手話をお互いに教えたり、中国や日本についての事を語ったり、またジョークを交わしたりするなど色々楽しく交流出来ました。一時間も交流していれば、お互いに友人のようでした。中国の学生の表情や身振りは、アメリカの学生とまた違ったものを感じました。例えば、笑ったりあるいは怒ったりするなど表情の変化が激しかったです。以前は、「中国人はクールだ」と思い込んでいましたが、現実は違いました。「日本人の方かクールじゃないのかな」と感じました。

アメリカ、中国、日本の聾教育システムについて色々知ることが出来ました。アメリカの学生は、手話中心で声はほとんど出していなかったが、中国の学生は、手話がほとんど出来なく、口話中心の学生が多くかったです。中国の学生は聴力が軽い人が多く、発音が良い人も少なくなかったです。一部の聾学校は、普通の学校と隣接している為、健聴者と交えて講義を受けることもありました。授業の様子は、口話中心でしたが、手話を使う先生も何人かいました。幼い時から発音を中心にして教えていく聾学校教育システムは、日本と同じような教育システムでした。それから、中国の学生に「国から聴覚障害に対してどんなことを行っているか」を伺ってみました。

「聴覚障害者には、車の免許を与えることが出来ない」ことについては、驚きました。他にも色々、禁止されていることがあります、中国の国自体が聴覚障害者に対する対策がアメリカや日本と比べて遅れていると強く感じました。

PENインターナショナル親善大使として中国を訪問しましたが、あらゆる所で「物足りなさ」を感じました。中国の学生は歓迎会など熱心に迎えてくれたり、立派なお土産を作ってくれたり、私達の為に色々なことをしてくれました。しかし、肝心の交流や会話は、なかなか上手く出来ませんでした。理由は、英語が判らない学生が多く、その人たちと会話するのに大変でした。世

界の共通語は「英語」であることをしっかりと学んで来てほしいという気持ちもありました。また、日本やアメリカの準備の方も足りなく、中国の学生に対して申し訳ないと思いました。今後のPENインターナショナルでの活動は、今回の中国の訪問で足りなかつた所や欠点などを見直し、各国の学生が上手く交流出来るようにし、本来の目的である「PEN-インターナショナル」を創り上げてほしいと思います。

この一週間、私は数多くの経験をさせてもらい、色々な新しい発見をしました。世界各国の色々な人と交流することで、視野が広がり、数多くの友人が出来、楽しくなるということがわかりました。そのような意味で、今回の訪問は大変貴重な経験でした。これから社会に出て行きますが、この貴重な経験を生かしてあらゆる面で社会貢献できる活動をして行きたいと思います。それから、今回の訪問を機に、これからも世界各国の旅行を計画し、色々な人々と交流をし、もっと視野を広めて行きたいと思います。

PENインターナショナル親善大使になって 電子情報学科情報工学専攻2年

平林 裕子

中国に行く前に、私は3月に研修旅行でアメリカに行って、アメリカの聾教育システムやアメリカの聾者が聴覚障害をどのように受けとめているか知ることができた。そして、世界中の聾者との交流に興味をもつようになった。大げさかもしれないが、高校まで健聴者と共に学んだ私は、この研修で生まれて初めて聾者の魅力に惚れたのである。それまでは「聞こえない」というたった一つのことに非常に劣等感を持っていて、健聴者として人生を送りたいと思っていた。しかし、アメリカの聾者の、耳が聞こえなくても、障害にめげずに生きてゆく姿がたくましく見えた。親善大使として中国へ派遣されるのを機に、アメリカだけでなく、中国の聾者が聴覚障害をどのようにとらえているのかも実際に見てみたかった。これが私の中国研修の目的であった。

中国は初めての訪問だったので、どんな国か興味があった。行ってみてまず驚いたのは、中国という国そのものである。道

幅は広く、交通量が多く、乗用車専用の他、自転車や歩行者専用の道路が広々としていた。しかし、その広大な乗用車用の道路にも自転車や徒步の姿があり、信号に従わずには道路を渡っている姿も見られた。また、色々な中国の雰囲気そのものが私を驚かせた。

天津理工学院聾人工学院や天津・北京にある聾学校を見学して、中国の聾教育システムについて実際に目で見る事ができた。中国の聾教育は日本と同じように口話教育であり、手話はサポートとして使用されていた。このような教育が行われていたということは、やはり中国の聾者も聴覚障害者であることを周りに隠しているのではないかと思った。でも、健聴者と共に授業をしている聾学校もあった。この学校では生徒同士との会話は手話であり、健聴者が聾者との区別が難しかったのは確かである。中国の聾教育システムは日本と似ているけれども、健聴者と一緒に授業を受けるというシステムがあるのは良いと思った。なぜなら、健聴者と聴覚障害者が共に過ごすことによって互いに理解でき、その経験を将来に活かせるからである。

中国の学生との交流では、初対面なのに当然のように中国語で書かれた紙を見せられたので戸惑ってしまった。英語を書いても、英語が出来ない人もいたので、なかなかコミュニケーションができなかつた。日本で買った中国語会話集の本を利用してコミュニケーションをとった。そしたら、会話集の中の単語に相応する中国手話を教えてくれた。中国手話は日本手話と似ているけれども、全く異なる面白い手話もあった。最終的にジェスチャーや手話でコミュニケーション

ーションがとれるようになり、楽しく交流をすることができた。日本の漢字を書いたら一発で通じたことがあり、とても驚いた。やはり、日本と中国の文化には歴史的な深い関わりがあったということを改めて知ることができた。

本来の目的であった中国の聾者は聴覚障害をどのように受けとめているのかというものを早速伺ってみた。そしたら「初めは、コミュニケーションの問題があつて、聾者という言葉は肯定的に受けとめられなかつた。今は、騒音など気にせず快適に生活できるなど良い面がたくさんあって聾者であることを誇りにしている。それから聾者同士の交流で、日本人の君に出会えたことも嬉しく思っている。」という言葉が返ってきた。これを聞いて、中国の聾者は聴覚障害を肯定的に受けとめているのだと感心した。

PENインターナショナル（高等教育ネットワーク）を完璧に作り上げるためには、各国の文化を知るべきだと思う。例えば、中国の聾者のほとんどが英語が出来ないので、コミュニケーションがスムーズにいかない。日本の漢字なら通じるが、アメリカ人には通じない。これらの問題を解決するには、やはり自国の文化をお互いに交換し合う経験が必要だと思う。世界共通の言語は英語なので、アメリカがまず日本や中国などにネットワークを用いて英語を教えるという事も良いかもしれない。PENインターナショナルを作り上げていく上ではやはり、言語の違いが壁だと思う。でも、この研修のように他国との交流をする機会を増やし、世界中の聾者が楽しく学び合える理想的な大学ができるることを心から願う。

スケジュール

11月25日（日）
13:40 北京空港着
15:00 北京市内京倫ホテルでNTIDと合流
17:30 天津理工大学着
18:00 夕食 大学内外人用宿舎に5泊
26日（月）
7:30 外人用宿舎で朝食（以下同じ）
9:00 歓迎会
9:30 学内見学
14:00 日米学生による教育事情発表
18:00 夕食

19:30 中国学生による演芸会
27日（火）
9:00 天津市内見学
18:00 天津の学生と交流
28日（水）
8:30 天津聾学校を訪問
14:00 大悲院（寺）見学
18:00 晩餐会
20:00 天津の学生と交流

2 9 日 (木)

8:30 石家大院（古い大規模な民家）見学

14:00 天津薌工科大学の教育内容発表

　学生の交流、お土産交換

18:00 天津の学生も交えた夕食会

19:30 日本人学生によるお茶会

3 0 日 (金)

7:30 NTIDの学生と北京へ出発

10:30 北京市第四薌学校見学

14:00 天壇公園見学 京倫ホテル1泊

1 2 月 3 1 (日)

9:00 天安門広場、故宮博物院見学

15:00 北京空港発